

【表紙】

【提出書類】	四半期報告書
【根拠条文】	金融商品取引法第24条の4の7第1項
【提出先】	関東財務局長
【提出日】	平成24年8月13日
【四半期会計期間】	第152期第1四半期（自平成24年4月1日至平成24年6月30日）
【会社名】	稲畑産業株式会社
【英訳名】	Inabata & Co.,Ltd.
【代表者の役職氏名】	代表取締役社長 社長執行役員 稲畑 勝太郎
【本店の所在の場所】	大阪市中央区南船場一丁目15番14号 （同所は登記上の本店所在地であり、実際の経理業務は主に下記記載の当社東京本社で行っております。）
【電話番号】	大阪（6267）6083（ダイヤルイン）
【事務連絡者氏名】	取締役 執行役員 横田 健一
【最寄りの連絡場所】	東京都中央区日本橋本町二丁目8番2号
【電話番号】	東京（3639）6421（ダイヤルイン）
【事務連絡者氏名】	経理部長 久保井 伸和
【縦覧に供する場所】	稲畑産業株式会社 東京本社 （東京都中央区日本橋本町二丁目8番2号） 稲畑産業株式会社 名古屋支店 （名古屋市中村区名駅三丁目22番8号 大東海ビル内） 株式会社東京証券取引所 （東京都中央区日本橋兜町2番1号） 株式会社大阪証券取引所 （大阪市中央区北浜一丁目8番16号）

第一部【企業情報】

第1【企業の概況】

1【主要な経営指標等の推移】

回次	第151期 第1四半期 連結累計期間	第152期 第1四半期 連結累計期間	第151期
会計期間	自平成23年4月1日 至平成23年6月30日	自平成24年4月1日 至平成24年6月30日	自平成23年4月1日 至平成24年3月31日
売上高(百万円)	116,869	120,295	464,429
経常利益(百万円)	2,009	2,452	8,834
四半期(当期)純利益(百万円)	1,274	1,919	6,297
四半期包括利益又は包括利益 (百万円)	1,986	891	7,979
純資産額(百万円)	72,703	77,767	77,730
総資産額(百万円)	237,444	253,062	251,045
1株当たり四半期(当期)純利益金額 (円)	19.64	29.96	97.45
潜在株式調整後1株当たり四半期 (当期)純利益金額(円)	-	-	-
自己資本比率(%)	30.3	30.4	30.7

(注) 1. 当社は四半期連結財務諸表を作成しておりますので、提出会社の主要な経営指標等の推移については記載しておりません。

2. 売上高には、消費税等は含まれておりません。

3. 潜在株式調整後1株当たり四半期(当期)純利益金額については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。

2【事業の内容】

当第1四半期連結累計期間において、当社グループ(当社及び当社の関係会社)が営む事業の内容について、重要な変更はありません。また、主要な関係会社における異動もありません。

なお、当第1四半期連結会計期間より報告セグメントの区分を変更しております。詳細は、「第4 経理の状況 1 四半期連結財務諸表 注記事項(セグメント情報等)」に記載のとおりであります。

第2【事業の状況】

1【事業等のリスク】

当第1四半期連結累計期間において、新たに発生した事業等のリスクはありません。
また、前事業年度の有価証券報告書に記載した「事業等のリスク」について重要な変更はありません。

2【経営上の重要な契約等】

該当事項はありません。

3【財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】

文中の将来に関する事項は、当四半期連結会計期間の末日現在において当社グループ（当社及び連結子会社）が判断したものであります。

(1) 業績の状況

当第1四半期連結累計期間における日本経済は、公共事業を中心とする復興関連需要や個人消費などの内需が堅調に推移し、緩やかに持ち直しつつあります。一方で、長期化する円高をはじめ、海外では欧州や中国景気の減速、新興国のインフレ懸念など、日本を取り巻く景気動向は不透明な状況で推移しております。

こうした中、当社の事業においては、主力の情報電子事業、合成樹脂事業を中心に堅調に推移し、連結ベースでの売上高は120,295百万円（対前年同期比2.9%増）、営業利益は1,886百万円（同5.7%増）となりました。また、持分法投資損益の改善により、経常利益は2,452百万円（同22.0%増）、四半期純利益は1,919百万円（同50.6%増）となりました。

セグメントの業績は、次のとおりであります。

なお、当第1四半期連結会計期間より、報告セグメントの区分を変更しており、以下の前年同四半期連結累計期間比較については、前年同四半期連結累計期間の数値を変更後のセグメント区分に組み替えた数値で比較しております。

（情報電子事業）

情報電子事業は、海外を中心に概ね順調でした。

液晶関連につきましては、国内では、大型液晶ユーザーが軒並み稼動を落としている一方、アジアでは、中国、台湾、韓国などのパネルメーカー向けが好調で、偏光板原料や光学シートなど関連材料が伸長しました。米州では、大型TV向けの部材販売が増加しました。

複写機関連につきましては、国内や米州においてトナー原料が伸長しました。

プリンター関連につきましては、欧州が不調であるものの全体としては市場が回復傾向にあり、材料の販売が順調でした。

半導体関連につきましては、米国、中国、台湾の市場は回復基調となりましたが、日本市場の低迷により、装置類、材料ともに苦戦しました。

太陽電池関連は、欧州では新規ビジネスの獲得により増加しましたが、全体としては市況の大幅な悪化により低迷しました。

これらの結果、売上高は48,180百万円(同3.0%増)となり、セグメント利益（営業利益）は737百万円（同25.1%増）となりました。

（化学品事業）

化学品事業は、パフォーマンスケミカル関連は微増でしたが、スペシャルティケミカル関連が落ち込み、全体では微減となりました。

スペシャルティケミカル関連につきまして、樹脂原料・添加剤は好調でしたが、タイの洪水被害の回復遅れの影響もあり、自動車部品材料販売は減少しました。

パフォーマンスケミカル関連につきまして、塗料・インキはUV関連原料を中心に低調でしたが、関連会社で生産するニトロセルロースの販売増により利益は伸長しました。また塗料原料の加工を行う中国の関連会社も順調でした。紙・ダンボール関連ビジネスは、震災の影響を受けて減産していた製紙メーカーの生産が復旧し、伸長しました。

これらの結果、売上高は10,709百万円(同2.3%減)となり、セグメント利益（営業利益）は111百万円（同38.0%減）となりました。

(生活産業事業)

生活産業事業は、ファーマケミカル関連は前年並みでしたが、食品関連が伸長しました。

ファーマケミカル関連につきましては、国内では、新薬、ジェネリック用の医薬品原料が好調でしたが、海外では、欧州市場の悪化の影響などでフランスの関係会社で製造しているファインケミカル製品が不調でした。殺虫剤原料ビジネスは、前年同期比減少しました。

食品関連につきましては、国内では、ブルーベリーや冷凍野菜の販売が量販店向けを中心に伸長しました。海外では、米州の冷凍フルーツが好調でした。

これらの結果、売上高は9,963百万円(同3.7%減)となり、セグメント利益(営業利益)は484百万円(同37.0%増)となりました。

(合成樹脂事業)

合成樹脂事業は、アジアにおける需要増を中心に販売が伸長しました。

樹脂材料関連につきましては、国内では、自動車関連材料の販売が堅調でした。東南アジアでは、インドネシアやタイでは車両分野を中心に、またベトナムではOA分野が好調でした。北東アジアでは、中国において車両分野やOA分野向けの樹脂販売が増加しました。米州では、TV向けの材料が伸長しました。

ポリエチレン樹脂関連につきましては、中盤よりナフサの値下がりによる先安感から荷動きが悪化しました。フィルム、シート関連も、復興需要の一巡、天候不順の影響などから減少となりました。

国内のグループ会社は、市場の停滞により前年度並みに推移しました。

これらの結果、売上高は46,143百万円(同5.2%増)となり、セグメント利益(営業利益)は458百万円(同24.0%減)となりました。

(住環境事業)

住環境事業は、住宅建材関連および環境資材関連ともに順調に推移しました。

住宅建材関連につきましては、欧州材関連の輸入や三国間貿易は、在庫調整の影響で減少しましたが、大手ハウスメーカーへの材料販売は、新規取引が開始されたこともあり好調でした。また、賃貸住宅向け資材販売も順調でした。

環境資材関連につきましては、昨年の震災の影響で減少した住宅設備機器メーカーに対する原料販売と製品仕入が、一昨年前の水準に回復しました。また新規拡販も売上増に寄与しました。

これらの結果、売上高は5,181百万円(同7.7%増)となり、セグメント利益(営業利益)は29百万円(同28.5%増)となりました。

(2) 財政状態の分析

当第1四半期連結会計期間末における資産合計は、前連結会計年度末に比べて2,017百万円増加(対前期末比0.8%増)し、253,062百万円となりました。

流動資産の増加6,086百万円は、主に現金及び預金、受取手形及び売掛金並びに商品及び製品が増加したこと等によるものであります。

固定資産の減少4,068百万円は、主に投資有価証券の時価の下落に伴う減少等によるものであります。

当第1四半期連結会計期間末における負債合計は、前連結会計年度末に比べて1,981百万円増加(同1.1%増)し、175,295百万円となりました。

流動負債の増加3,386百万円は、主に短期借入金が増加したものの、支払手形及び買掛金が増加したこと等によるものであります。

固定負債の減少1,405百万円は、主としてその他の減少等によるものであります。その内容は主に繰延税金負債であります。

当第1四半期連結会計期間末における純資産は、前連結会計年度末に比べて36百万円増加(同微増)し、77,767百万円となりました。これは、主に利益剰余金及び為替換算調整勘定が増加したものの、その他有価証券評価差額金が増加したこと等によるものであります。

この結果、自己資本比率は30.4%(前連結会計年度末より0.3ポイント減)となりました。

(3) 事業上及び財務上の対処すべき課題

事業上及び財務上の対処すべき課題

当第1四半期連結累計期間において、当社グループが対処すべき課題について重要な変更はありません。

当社の財務及び事業の方針の決定を支配する者の在り方に関する基本方針

1. 当社の財務及び事業の方針の決定を支配する者の在り方に関する基本方針

当社としましては、特定の者による当社の財務及び事業の方針の決定に影響を及ぼすことが可能な数の当社株式を取得することを目的とする大規模な買付行為が行われようとする場合、これに応じて当社株式の売却を行うか否かは、最終的には当社株主の判断に委ねられるべきものであると考えます。

しかし、当社は、グループとして、国内外に子会社55社、関連会社22社を有し、日本、東南アジア、北東アジア、米州及び欧州の5つのリージョンに跨り、情報電子、化学品、生活産業、合成樹脂、住環境、その他各分野における商品の販売及び製造を主な内容とした多岐に亘る事業展開を行っており、当社の経営にあたっては、幅広いノウハウと豊富な経験、並びに国内外の顧客・従業員及び取引先等のステークホルダーとの間に築かれた関係等への十分な理解が不可欠です。当社の財務及び事業の方針の決定を支配する者にこれらに関する十分な理解がなくては、株主が将来実現することのできる株主価値を毀損してしまう可能性があります。

突然に大規模な買付行為がなされた場合、買付者の提示する当社株式の取得対価が妥当かどうかを株主が短期間の内に適切に判断するためには、買付者及び当社取締役会の双方から適切かつ十分な情報が提供されることが不可欠であります。更に、当社株式をそのまま継続的に保有することを考える株主にとっても、当該大規模な買付行為が当社に与える影響や、当社の従業員、関係会社、顧客及び取引先等のステークホルダーとの関係についての方針を含む、買付者が考える当社の経営に参画したときの経営方針や事業計画の内容等は、その継続保有を検討するうえで重要な判断材料であります。同様に、当社取締役会が当該大規模な買付行為についてどのような意見を有しているのかも、当社株主にとっては重要な判断材料となると考えます。

以上のことを考慮し、当社としましては、当社の財務及び事業の方針の決定に影響を及ぼすことが可能な数の当社株式を取得することを目的とする大規模な買付行為に際しては、買付者は、株主の判断のために、当社が設定し事前に開示する一定のルール（以下「大規模買付ルール」といいます。）に従って、必要かつ十分な当該買付行為に関する情報を当社取締役会に事前に提供し、一定の評価期間が経過した後のみ当該買付行為を開始すべきであると考えております。

また、大規模な買付行為の中には、当該買付行為が明らかに濫用目的によるものと認められ、その結果として当社に回復し難い損害をもたらす等、当社株主全体の利益を著しく損なうものもないとは言えません。当社は、かかる買付行為に対して、当社取締役会が大規模買付ルールに従って適切と考える方策を取ること、当社株主全体の利益を守るために必要であると考えております。なお、平成24年6月30日現在、住友化学株式会社が当社の発行済株式の21.23%を保有する筆頭株主となっていますが、昭和19年7月に同社の製造する医薬品の日本における総販売元となって以降同社とは良好な関係を保っています。しかしながら、今後、株主による株式譲渡等によって株主構成が変動するとともに当社株式の流動性が増す可能性があることや、今後の事業拡大のため新たに資本市場から資金を調達する可能性があり同社の保有割合が低下する可能性があること等に鑑みると、当社株主全体の利益を毀損する大規模買付行為（以下に定義します。）がなされる可能性があると考えています。

2. 当社の財産の有効な活用、適切な企業集団の形成その他の基本方針の実現に資する特別な取組み

当社は、上記1.記載の基本方針の実現に資する特別な取組みとして、以下の取組みを行っております。

- (1) 伸びゆくアジア・中国地域へ一層の経営資源を投入し、当社が強みを持つアジア事業を徹底的に強化すること
- (2) インドに引き続き、中南米、トルコなどの新興国市場を新たに開拓していくこと
- (3) 環境・エネルギー、ライフサイエンス事業の育成・強化を図ること
- (4) グローバル人材育成のスピードアップを図ること
- (5) 厳選した投資を実施し、確実なリターンを得ていくこと
- (6) 更なる資金効率・資産効率を追求し、ROE、ROA、D/Eレシオの向上を図ること

上記取組みは、当社グループの市場価値を向上させ、その結果、当社株主全体の利益を著しく損なう大規模買付者（以下に定義します。）が現れる危険性を低減するものであるため、上記会社支配に関する基本方針に沿うものであると考えます。また、かかる取組みは、当社グループの価値を向上させるものであるため、当社株主の共同の利益を損なうものではなく、当社社員の地位の維持を目的とするものではないことは明らかであると考えます。

3. 基本方針に照らして不適切な者によって当社の財産及び事業の方針の決定が支配されることを防止するための取組み

(1) 基本方針に照らして不適切な者によって当社の財産及び事業の方針の決定が支配されることを防止するための取組みの内容

当社は、上記1. で述べた基本方針に照らして不適切な者によって会社の財務及び事業の方針の決定が支配されることを防止するための取組みとして、特定株主グループの議決権割合を20%以上とすることを目的とする当社株券等の買付行為、又は結果として特定株主グループの議決権割合が20%以上となる当社株券等の買付行為（いずれについてもあらかじめ当社取締役会が同意したものを除き、また市場取引、公開買付け等の具体的な買付方法の如何を問いません。以下、かかる買付行為を「大規模買付行為」といい、かかる買付行為を行う者を「大規模買付者」といいます。）を対象とする大規模買付ルールを設定し、大規模買付者がこれを遵守した場合と遵守しなかった場合の対応方針（以下、「本対応方針」といいます。）を定めております。

(2) 本対応方針が基本方針に沿うものであること、株主共同利益を損なうものではないこと及び会社役員の地位の維持を目的とするものではないこと並びにその理由

ア. 本対応方針が基本方針に沿うものであること

本対応方針は、大規模買付ルールの内容、大規模買付行為が為された場合の対応方針、独立委員会の設置、株主及び投資家に与える影響等を規定するものです。

本対応方針は、大規模買付者が必要かつ十分な大規模買付行為に関する情報を当社取締役会に事前に提供すること、及び一定の評価期間が経過した後にのみ当該大規模買付行為を開始することを求め、これを遵守しない大規模買付者に対して当社取締役会が対応措置を講じることがあることを明記しています。

また、大規模買付ルールが遵守されている場合であっても、大規模買付者の大規模買付行為が当社株主全体の利益を著しく損なうものと当社取締役会が判断した場合には、かかる大規模買付者に対して当社取締役会は当社株主全体の利益を守るために適切と考える対抗措置を講じることがあることを明記しています。

このように本対応方針は、会社支配に対する基本方針の考え方に沿って設計されたものであると言えます。

イ. 本対応方針が株主の共同の利益を損なうものではないこと

上記1. 記載のとおり、会社支配に対する基本方針は、当社株主の共同の利益を尊重することを前提としています。本対応方針は、かかる会社支配に対する基本方針の考え方に沿って設計され、当社株主が大規模買付行為に応じるか否かを判断するために必要な情報や当社取締役会の意見の提供、代替案の提示を受ける機会の提供を保障することを目的としております。本対応方針によって、当社株主の共同の利益を損なうものではなく、むしろその利益に資するものであると考えます。

更に、本対応方針の有効期限は3年間であるところ、その発効・延長は当社株主の承認を前提としており、当社株主総会において継続が承認されなければ本対応方針は失効し、また、当社株主総会又は株主総会で選任された取締役で構成される取締役会によって有効期限前に廃止することも可能です。また、本対応方針は、デッドハンド型買収防衛策（取締役会の構成員の過半数を交代させても、なお発動を阻止できない買収防衛策。）や、スローハンド型買収防衛策（取締役会の構成員の交代を一度に行うことができないため、その発動を阻止するのに時間を要する買収防衛策。）ではありません。これらのことは、本対応方針が当社株主の共同の利益を損なわないことを担保していると考えられます。

ウ. 本対応方針が会社役員の地位の維持を目的とするものではないこと

本対応方針は、大規模買付行為を受け入れるか否かが最終的には当社株主の判断に委ねられるべきことを大原則としつつ、当社株主全体の利益を守るために必要な範囲で大規模買付ルールの遵守の要請や対抗措置の発動を行うものです。本対応方針は当社取締役会が対抗措置を発動する場合を事前かつ詳細に開示しており、当社取締役会による対抗措置の発動はかかる本対応方針の規定に従って行われます。

また、大規模買付行為に関して当社取締役会が評価・検討、取締役会としての意見のとりまとめ、代替案の提示、大規模買付者との交渉を行い、又は対抗措置を発動する際には、独立の外部専門家等の助言を得るとともに、当社の業務執行を行う経営陣から独立している委員で構成される独立委員会へ諮問し、同委員会の勧告を最大限尊重するものとされています。更に、大規模買付行為に対する対抗措置を発動するにあたり、独立委員会の勧告を受けた場合には、当該対抗措置を発動するか否かについて当社株主の意思を確認するものとされています。このように、本対応方針には、当社取締役会による適正な運用を担保するための手続も盛り込まれています。

以上から、本対応方針が当社役員の地位の維持を目的とするものではないことは明らかであると考えております。

(4) 研究開発活動

当第1四半期連結累計期間におけるグループ全体の研究開発活動の金額は、32百万円であります。
なお、当第1四半期連結累計期間において、当社グループの研究開発活動の状況に重要な変更はありません。

第3【提出会社の状況】

1【株式等の状況】

(1)【株式の総数等】

【株式の総数】

種類	発行可能株式総数(株)
普通株式	200,000,000
計	200,000,000

【発行済株式】

種類	第1四半期会計期間末現在発行数(株) (平成24年6月30日)	提出日現在発行数(株) (平成24年8月13日)	上場金融商品取引所名 又は登録認可金融商品 取引業協会名	内容
普通株式	65,159,227	65,159,227	東京証券取引所 大阪証券取引所 各市場第一部	単元株式数 100株
計	65,159,227	65,159,227	-	-

(2)【新株予約権等の状況】

該当事項はありません。

(3)【行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等】

該当事項はありません。

(4)【ライツプランの内容】

該当事項はありません。

(5)【発行済株式総数、資本金等の推移】

年月日	発行済株式総 数増減数 (千株)	発行済株式総 数残高 (千株)	資本金増減額 (百万円)	資本金残高 (百万円)	資本準備金増 減額 (百万円)	資本準備金残 高(百万円)
平成24年4月1日						
~	-	65,159	-	9,364	-	7,708
平成24年6月30日						

(6)【大株主の状況】

当四半期会計期間は第1四半期会計期間であるため、記載事項はありません。

(7)【議決権の状況】
 【発行済株式】

平成24年6月30日現在

区分	株式数(株)	議決権の数(個)	内容
無議決権株式	-	-	-
議決権制限株式(自己株式等)	-	-	-
議決権制限株式(その他)	-	-	-
完全議決権株式(自己株式等)	(自己保有株式) 普通株式 869,200	-	-
	(相互保有株式) 普通株式 5,000	-	-
完全議決権株式(その他)	普通株式 64,274,700	642,747	-
単元未満株式	普通株式 10,327	-	一单元(100株)未満の株式
発行済株式総数	65,159,227	-	-
総株主の議決権	-	642,747	-

【自己株式等】

平成24年6月30日現在

所有者の氏名又は名称	所有者の住所	自己名義所有株式数(株)	他人名義所有株式数(株)	所有株式数の合計(株)	発行済株式総数に対する所有株式数の割合(%)
(自己保有株式) 稲畑産業(株)	大阪市中央区南船場 一丁目15番14号	869,200	-	869,200	1.33
(相互保有株式) (株)クリーン・アシスト	東京都新宿区新宿一 丁目10番4号 新宿1丁目ビル6階	5,000	-	5,000	0.01
計	-	874,200	-	874,200	1.34

2【役員の状況】

前事業年度の有価証券報告書の提出日後、当四半期累計期間において、役員の異動はありません。

第4【経理の状況】

1．四半期連結財務諸表の作成方法について

当社の四半期連結財務諸表は、「四半期連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」（平成19年内閣府令第64号）に基づいて作成しております。

2．監査証明について

当社は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、第1四半期連結会計期間（平成24年4月1日から平成24年6月30日まで）及び第1四半期連結累計期間（平成24年4月1日から平成24年6月30日まで）に係る四半期連結財務諸表について、有限責任 あずさ監査法人による四半期レビューを受けております。

1【四半期連結財務諸表】
(1)【四半期連結貸借対照表】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (平成24年3月31日)	当第1四半期連結会計期間 (平成24年6月30日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	11,242	12,493
受取手形及び売掛金	² 139,724	² 142,537
商品及び製品	29,286	30,882
仕掛品	585	730
原材料及び貯蔵品	2,516	3,084
その他	6,692	6,475
貸倒引当金	579	647
流動資産合計	189,470	195,556
固定資産		
有形固定資産	9,681	9,865
無形固定資産		
のれん	178	178
その他	5,450	5,126
無形固定資産合計	5,629	5,304
投資その他の資産		
投資有価証券	40,228	36,418
その他	7,696	7,522
貸倒引当金	1,661	1,604
投資その他の資産合計	46,264	42,336
固定資産合計	61,574	57,506
資産合計	251,045	253,062
負債の部		
流動負債		
支払手形及び買掛金	² 82,176	² 93,192
短期借入金	62,641	55,324
未払法人税等	738	737
賞与引当金	834	503
事業整理損失引当金	148	148
その他	5,588	5,609
流動負債合計	152,129	155,516
固定負債		
長期借入金	11,429	11,502
退職給付引当金	451	484
役員退職慰労引当金	18	19
事業整理損失引当金	58	52
債務保証損失引当金	18	18
その他	9,207	7,701
固定負債合計	21,184	19,778
負債合計	173,314	175,295

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (平成24年3月31日)	当第1四半期連結会計期間 (平成24年6月30日)
純資産の部		
株主資本		
資本金	9,364	9,364
資本剰余金	7,708	7,708
利益剰余金	50,908	52,058
自己株式	495	495
株主資本合計	67,485	68,636
その他の包括利益累計額		
その他有価証券評価差額金	15,809	13,172
繰延ヘッジ損益	33	15
為替換算調整勘定	6,355	4,756
その他の包括利益累計額合計	9,488	8,400
少数株主持分	756	731
純資産合計	77,730	77,767
負債純資産合計	251,045	253,062

(2) 【四半期連結損益計算書及び四半期連結包括利益計算書】

【四半期連結損益計算書】

【第1四半期連結累計期間】

(単位：百万円)

	前第1四半期連結累計期間 (自平成23年4月1日 至平成23年6月30日)	当第1四半期連結累計期間 (自平成24年4月1日 至平成24年6月30日)
売上高	116,869	120,295
売上原価	109,080	112,058
売上総利益	7,788	8,236
販売費及び一般管理費	6,003	6,350
営業利益	1,784	1,886
営業外収益		
受取利息	58	64
受取配当金	422	398
為替差益	78	30
持分法による投資利益	-	227
雑収入	277	147
営業外収益合計	836	868
営業外費用		
支払利息	219	256
持分法による投資損失	268	-
雑損失	122	45
営業外費用合計	611	302
経常利益	2,009	2,452
特別利益		
固定資産売却益	-	118
特別利益合計	-	118
税金等調整前四半期純利益	2,009	2,571
法人税、住民税及び事業税	389	342
法人税等調整額	284	274
法人税等合計	673	617
少数株主損益調整前四半期純利益	1,336	1,953
少数株主利益	62	34
四半期純利益	1,274	1,919

【四半期連結包括利益計算書】
 【第1四半期連結累計期間】

(単位：百万円)

	前第1四半期連結累計期間 (自平成23年4月1日 至平成23年6月30日)	当第1四半期連結累計期間 (自平成24年4月1日 至平成24年6月30日)
少数株主損益調整前四半期純利益	1,336	1,953
その他の包括利益		
その他有価証券評価差額金	228	2,611
繰延ヘッジ損益	43	49
為替換算調整勘定	469	1,498
持分法適用会社に対する持分相当額	3	100
その他の包括利益合計	650	1,062
四半期包括利益	1,986	891
(内訳)		
親会社株主に係る四半期包括利益	1,923	831
少数株主に係る四半期包括利益	63	59

【連結の範囲又は持分法適用の範囲の変更】

(連結の範囲の重要な変更)

当第1四半期連結会計期間より、従来持分法適用非連結子会社であったINABATA VIETNAM CO., LTD.は重要性の観点により連結の範囲に含めております。また、S-IK COLOR PHILS., INC.は清算終了により、連結の範囲から除外しております。

【会計方針の変更】

(減価償却方法の変更)

当社は、法人税法の改正に伴い、当第1四半期連結会計期間より、平成24年4月1日以後に取得した有形固定資産について、改正後の法人税法に基づく減価償却方法に変更しております。

なお、これによる損益に与える影響は軽微であります。

【注記事項】

(四半期連結貸借対照表関係)

1. 保証債務

(1) 下記の各社の銀行借入等に保証を行っております。

	前連結会計年度 (平成24年3月31日)		当第1四半期連結会計期間 (平成24年6月30日)
NOBEL NC CO., LTD.	2,811百万円	NOBEL NC CO., LTD.	2,604百万円
SUMIKA TECHNOLOGY CO., LTD.	2,708	SUMIKA TECHNOLOGY CO., LTD.	2,494
アルバック成膜㈱	762	アルバック成膜㈱	687
その他9社	893	その他8社	878
計	7,175	計	6,665

(注) 上記金額は、当社及び連結子会社の自己負担額を記載しております。

(2) 受取手形割引高

	前連結会計年度 (平成24年3月31日)	当第1四半期連結会計期間 (平成24年6月30日)
受取手形割引高	71百万円	55百万円

2. 第1四半期連結会計期間末日満期手形の会計処理

第1四半期連結会計期間末日満期手形の会計処理については、手形交換日をもって決済処理しております。

なお、当第1四半期連結会計期間末日が金融機関の休日であったため、次の第1四半期連結会計期間末日満期手形が当第1四半期連結会計期間末日残高に含まれております。

	前連結会計年度 (平成24年3月31日)	当第1四半期連結会計期間 (平成24年6月30日)
受取手形	2,217百万円	2,261百万円
支払手形	116百万円	678百万円

(四半期連結キャッシュ・フロー計算書関係)

当第1四半期連結累計期間に係る四半期連結キャッシュ・フロー計算書は作成しておりません。なお、第1四半期連結累計期間に係る減価償却費(のれんを除く無形固定資産に係る償却費を含む。)、のれんの償却額及び負ののれんの償却額は、次のとおりであります。

	前第1四半期連結累計期間 (自平成23年4月1日 至平成23年6月30日)	当第1四半期連結累計期間 (自平成24年4月1日 至平成24年6月30日)
減価償却費	736百万円	749百万円
のれんの償却額	22	22
負ののれんの償却額	13	-

(株主資本等関係)

前第1四半期連結累計期間(自平成23年4月1日至平成23年6月30日)

配当金支払額

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり 配当額 (円)	基準日	効力発生日	配当の原資
平成23年5月11日 取締役会	普通株式	1,236	19	平成23年3月31日	平成23年6月3日	利益剰余金

当第1四半期連結累計期間(自平成24年4月1日至平成24年6月30日)

配当金支払額

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり 配当額 (円)	基準日	効力発生日	配当の原資
平成24年5月8日 取締役会	普通株式	771	12	平成24年3月31日	平成24年6月5日	利益剰余金

(セグメント情報等)

【セグメント情報】

前第1四半期連結累計期間(自平成23年4月1日至平成23年6月30日)

報告セグメントごとの売上高及び利益又は損失の金額に関する情報

(単位:百万円)

	報告セグメント						その他 (注)1	合計	調整額	四半期連結 損益計算書 計上額 (注)2
	情報電子	化学品	生活産業	合成樹脂	住環境	計				
売上高										
(1) 外部顧客への売上高	46,755	10,960	10,348	43,861	4,809	116,736	132	116,869	-	116,869
(2) セグメント間の内部売上高又は振替高	-	138	-	-	-	138	-	138	138	-
計	46,755	11,099	10,348	43,861	4,809	116,874	132	117,007	138	116,869
セグメント利益	589	179	353	603	23	1,749	34	1,784	-	1,784

(注)1. 「その他」の区分は、報告セグメントに含まれない事業セグメントであり、リース業及び不動産賃貸業等でありませぬ。

2. セグメント利益の合計額は、四半期連結損益計算書の営業利益と一致してあります。

当第1四半期連結累計期間(自平成24年4月1日至平成24年6月30日)

報告セグメントごとの売上高及び利益又は損失の金額に関する情報

(単位:百万円)

	報告セグメント						その他 (注)1	合計	調整額	四半期連結 損益計算書 計上額 (注)2
	情報電子	化学品	生活産業	合成樹脂	住環境	計				
売上高										
(1) 外部顧客への売上高	48,180	10,709	9,963	46,143	5,181	120,178	116	120,295	-	120,295
(2) セグメント間の内部売上高又は振替高	-	129	-	-	-	129	-	129	129	-
計	48,180	10,839	9,963	46,143	5,181	120,308	116	120,424	129	120,295
セグメント利益	737	111	484	458	29	1,821	64	1,886	-	1,886

(注)1. 「その他」の区分は、報告セグメントに含まれない事業セグメントであり、不動産賃貸業等でありませぬ。

2. セグメント利益の合計額は、四半期連結損益計算書の営業利益と一致してあります。

3. 報告セグメントの変更等に関する事項

当第1四半期連結会計期間より、更なる意思決定の迅速化及び機動力のある組織の構築を目的とした会社組織の変更に伴い、「化学品事業」及び「食品事業」を、「化学品事業」及び「生活産業事業」に変更してあります。

従来の「化学品事業」からライフサイエンス関連を移管し、また「食品事業」と統合することにより、生活関連商材を集約したうえで新たに「生活産業事業」といたしました。また、変更後の「化学品事業」は、工業化学品関連に特化してあります。

なお、前第1四半期連結累計期間のセグメント情報は、変更後の報告セグメントの区分に基づき作成したものを開示してあります。

(1株当たり情報)

1株当たり四半期純利益金額及び算定上の基礎は、以下のとおりであります。

	前第1四半期連結累計期間 (自平成23年4月1日 至平成23年6月30日)	当第1四半期連結累計期間 (自平成24年4月1日 至平成24年6月30日)
1株当たり四半期純利益金額	19円64銭	29円96銭
(算定上の基礎)		
四半期純利益金額(百万円)	1,274	1,919
普通株主に帰属しない金額(百万円)	-	-
普通株式に係る四半期純利益金額(百万円)	1,274	1,919
普通株式の期中平均株式数(株)	64,868,594	64,068,553

(注) 潜在株式調整後1株当たり四半期純利益金額については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。

(重要な後発事象)

該当事項はありません。

2【その他】

(剰余金の配当)

平成24年5月8日開催の取締役会において、平成24年3月31日の最終の株主名簿に記載または記録された株主もしくは登録株式質権者に対し、剰余金の配当(期末)を行うことを次のとおり決議しました。

配当財産の種類及び帳簿価額の総額	金銭による配当	総額771百万円
株主に対する配当財産の割当てに関する事項		1株当たり12円
当該剰余金の配当がその効力を生ずる日		平成24年6月5日

第二部【提出会社の保証会社等の情報】

該当事項はありません。

独立監査人の四半期レビュー報告書

平成24年 8月10日

稲畑産業株式会社
取締役会 御中

有限責任 あずさ監査法人

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 井上 浩一 印

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 中畑 孝英 印

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 久世 雅也 印

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、「経理の状況」に掲げられている稲畑産業株式会社の平成24年4月1日から平成25年3月31日までの連結会計年度の第1四半期連結会計期間（平成24年4月1日から平成24年6月30日まで）及び第1四半期連結累計期間（平成24年4月1日から平成24年6月30日まで）に係る四半期連結財務諸表、すなわち、四半期連結貸借対照表、四半期連結損益計算書、四半期連結包括利益計算書及び注記について四半期レビューを行った。

四半期連結財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる四半期連結財務諸表の作成基準に準拠して四半期連結財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない四半期連結財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した四半期レビューに基づいて、独立の立場から四半期連結財務諸表に対する結論を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる四半期レビューの基準に準拠して四半期レビューを行った。

四半期レビューにおいては、主として経営者、財務及び会計に関する事項に責任を有する者等に対して実施される質問、分析的手続その他の四半期レビュー手続が実施される。四半期レビュー手続は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して実施される年度の財務諸表の監査に比べて限定された手続である。

当監査法人は、結論の表明の基礎となる証拠を入手したと判断している。

監査人の結論

当監査法人が実施した四半期レビューにおいて、上記の四半期連結財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる四半期連結財務諸表の作成基準に準拠して、稲畑産業株式会社及び連結子会社の平成24年6月30日現在の財政状態及び同日をもって終了する第1四半期連結累計期間の経営成績を適正に表示していないと信じさせる事項がすべての重要な点において認められなかった。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以上

- (注) 1. 上記は、四半期レビュー報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社（四半期報告書提出会社）が別途保管しております。
2. 四半期連結財務諸表の範囲にはX B R Lデータ自体は含まれていません。